「日本思想における共生――仏教・儒教・神道など伝統思想の観点から」

頼住光子先生（駒澤大学仏教学部仏教学科教授）

本発表では、仏教、儒教、神道といった日本の代表的な伝統思想を手がかりとしながら「共生」の概念を検討する。

「共生」とは、人間にとって基本的な事柄であり、共同体の中での相互作用を通じて形成されるものである。しかし、近代以降、主客二元対立的認識論に基づく理性による自然の支配や個人主義が強調される中で、「共生」の実現は困難を伴うようになった。特に、何ものにも掣肘されない自由を目指す近代的自我は、ともすれば他者を操作対象と見なし、真の「共生」関係を築くことが困難になり、それは、現代においてますます深刻化している。

そこで、本稿においては、日本人の思想の基盤をなしてきた仏教、儒教、神道といった前近代の思想に着目して、その「共生」の思想を検討する。

仏教における「共生」の思想としては、道元を取り上げる。道元を含む大乗仏教の思想では、「自他一如」「自他不二」の概念が強調され、自己と他者とが互いに相互相依的であり、他者との関係を通じて自己を形成することが重要視される。道元は「四摂法（ししょうぼう）」を通じて、他者への施しや愛語、利行、同事を提唱し、これらは共生の実現に寄与する。

儒教からは伊藤仁斎を取り上げる。仁斎は、朱子学を批判し、日常の人間関係における徳の実践を重視した。彼は「四端（したん）の心」を拡充することで、個々人が実現する仁（慈愛）が世界全体に広がり、世界を成り立たせる根源的な「生々」の力を活性化することができると捉えた。

神道においては、共同体の維持と発展が祈願の中心であり、祭祀を通じて「自然の無制約的な力」を調和的に取り込むことが、共生を可能にした。和辻哲郎は、その著『日本倫理思想史』において神の性質を分析し、神道の祭祀を通じて人と自然の共生が達成されると主張した。

総じて、日本の伝統思想は、共生の基盤として「自他一如」（仏教）や「生々」（儒教）、「自然の無制約的な力」（神道）を重視し、有限な人間の主体性を支える「無限なるもの」の自覚を通じて真の共生を実現することを、日本の伝統思想は主張していると言えるだろう。

「インド人の思考法と共生」

宮本久義先生（元東洋大学教授）

インド人はいかによく生きるか、そして死ぬかについて、とことん考え抜いた人たちである。インダス文明を含めると、およそ 5000 年の歴史を持つインド。そこで醸成された輪廻や解脱などの人生に関わるさまざまな重要な価値観は日本にまでもたらされ、現在まで私たちの生き方の重要な規範となっている。紀元前 5 世紀を中心に前後数百年のあいだに展開したウパニシャッド思想の中核は、万物に内在するブラフマンと呼ばれる最高原理である。これを究明していけば解脱に到達する。一方、個人の人格を成り立たしめているアートマンと呼ばれる最高原理について思索することでも解脱は得られる。しかし、ウパニシャッドの哲人たちはハードルを上げた。ブラフマンとアートマンは、同じものであるが、別のものである。そのことを認識したときはじめて本来の解脱が得られるのだと。このように梵我一如の思想は次第に不二一元論の流れになっていくが、それとともに、大雑把に言って紀元前後より、私たちが見ている対象は現実ではない、という議論が盛んに行われるようになってくる。仏教では、中観派、唯識派が論陣を張り、ヒンドゥー教では、文法学派のバルトリハリの語常住論やヴェーダーンタ学派のシャンカラの幻影主義的不二一元論が重要な議論を展開する。特に、バルトリハリは、仮想現実を成立せしめている存在としてことばを考えている。世界はことばであり、ことばがないところに世界はない、と。眼に見える現実世界はないという考えは、その後、哲学学派の一部の論として残っていくが、シャンカラ以外のヴェーダーンタ学派などは現象世界は実在するという現実肯定派の考えを主張するようになる。しかしインド思想史上、仮想現実論の影響は大きく、現在に至るまでインド人が IT に強いというわれる所以となっている。最後に、共生についてひと言。ヒンドゥー教にはカーストという差別思想が含まれる。20 世紀以降、カースト思想の桎梏からの脱却を図って多くの人びとが尽力した。しかし、まだまだ平等の社会が訪れる気配はない。そもそもインド人自身が得意とする仮想現実が、前世という別の形で下層カーストの人びとの足枷となっているのである。今でも多くの人びとは前世に行った業の果報で今の現実があると考える。この連鎖を断ち切るためには、あらたなパラダイムシフトが必要となろう。そして下層カーストの青年にとって、それは www.を駆使する IT 企業の戦士になることなのかもしれない。